

インクルーシブデザインは、ロンドンにあるデザインに関する学術機関として著名な英国王立芸術大学（ロイヤル・カレッジ・オブ・アート、以下RCA）の名誉教授ロジャー・コールマン氏が一九九四年に提唱をはじめたことばである。

まずは成り立ちを見てみよう。インクルーシブデザインと類似することばとしてユニバーサルデザインがある。これはアメリカのノースカロライナ州立大学にあるセクター・フォー・ユニバーサルデザインのロン・メイス博士が提唱したことばで、日本でも二〇〇〇年ごろから民間企業の商品や公共のサービスを通じて普及した。ユニバーサルデザインが、アメリカの公民権運動の流れから不公平なアクセシビリティ（利用のしやすさ）の解決をうたっているのに対し、ヨーロッパ発のインクルーシブデザインは、ソーシャルインクルージョン（社会的包摂）の視点が中心にある。つまり、インクルーシブデザインは、「これまで除外されてきた人びとを包摂し、かつビジネスとして成り立つデザイン」と定義されており、社会的排除の解決に重点がある。

排除は、RCAインクルーシブデザイン研究拠点ヘレン・ハムリン・センター・フォー・デザインの客員特別研究員ジュリア・カセム氏によると大きく六つに分類される。それら

# インクルーシブデザイン

## Inclusive Design

ひらい やすゆき 九州大学大学院准教授  
平井 康之

みんなが  
うらやむ  
人間学の  
キーワード

は、社会的な解決が身体的な障がいに対応できていない「身体的排除」、視覚や聴覚などの「感覚的排除」、外国でその国のことばを理解できないなどの「知覚的排除」、ITに関する知識の違いからくる「デジタル化による排除」、社会からの疎外感のような「感情的排除」、そして貧困などの「経済的排除」の六つで、「感情的排除」が一番難しいと述べている。

「感情的排除」について、興味深いエピソードがある。ロジャー・コールマン氏の友人に車椅子で生活をしているキャサリンという女性がいた。彼女は住んでいるマンションのキッチンのデザインを彼に依頼した。彼は、下肢の邪魔にならないキャビネットや車椅子使用者に見合うカウンターの高さなどを考えていたが、彼女の口から出たのは意外にも「ご近所さんが羨むデザインにしてほしい」というリクエストであった。この話は、誰でもが他の人びとと同じように楽しめるデザインや、不安やストレスを感じなくて済む「感情的排除」の解決をよくあらわしている。

インクルーシブデザインは最近ようやく日本でも理解が広がってきた。ユニバーサルミュージアムにも関連の深い内容であり、今後博物館での取り組みも増えていくことが予想される。機能的な解決のみを考えがちであるが、「感情的排除」も解決するインクルーシブなデザインが望まれる。